

## Y2-29

当院の研修医に対する感染症教育について グラム染色免許皆伝を目指して

名古屋第二赤十字病院 検査病理科<sup>1)</sup>、  
名古屋第二赤十字病院 総合内科<sup>2)</sup>  
原 祐樹<sup>1)</sup>、川島 誠<sup>1)</sup>、城殿麻利子<sup>1)</sup>、  
浅井 幸江<sup>1)</sup>、野村 勇介<sup>1)</sup>、伊藤 守<sup>1)</sup>、  
丹羽 一貴<sup>2)</sup>

【目的】近年、感染症に対する教育の必要性が重視されるようになってきている。しかし2年間という短期間で様々な診療科をローテートする研修医に対して十分な感染症教育をすることは非常に難しいのが現状である。今回我々は、感染症の初期診断において重要な検査であるグラム染色を中心とした研修を実施したので報告する。

【方法】研修医2年次および総合内科配属の新任医師を対象とし、2010年から2011年4月までに研修を受けた医師について、記述式のアンケートを実施しそのアンケートの回答結果について集計を行った。

【成績】「興味をもって実習に臨めましたか」との質問には6名中6名が「はい」と回答した。「研修の回数や時間は適当ですか」との質問には、全員が「はい」と回答し、「現在より回数や時間を増やしてもよい」との回答も見られた。「実習に参加することで日常診療に影響がありましたか」との質問には2名が「少し不都合が生じた」と回答した。「今後、自分1人でグラム染色を実施できますか」との質問には、6名中5名が「はい」と回答したが、「マニュアルが必要」、「品質の保証はできないが可能」といった条件付であった。また研修を終了した医師には、微生物検査室が独自に作成したグラム染色のポケットマニュアルを修了証として渡した。

【結論】研修実施後には、医師自らがグラム染色を実施するために検査室を訪室することが増えたことから研修には効果があったと考えられる。またアンケートの集計から把握することができた課題もあったことから、より充実した研修が行えるように改善をしていきたい。

## Y2-30

インドネシア人看護師候補者受け入れ  
第2報

姫路赤十字病院 看護部  
柴田由美子、芝山 富子、三木 幸代

当院は、2008年に第1陣のインドネシア人看護師候補者2名を受け入れ、そのうちの1名(SUWARTI)が、今年3回目の挑戦で看護師国家試験に合格した。インドネシア人候補者としては、赤十字医療施設で初めてであり、外国人合格者16名中の1名である。前年度不合格の結果を受け、「1年で絶対合格」を合言葉に学習方法を変更した。2名が揃って同じ内容で学習していたが、それぞれの理解度やレベルを再度分析し、本人達の希望も組み入れた学習方法を立て担当者も別にした。当院や周囲のバックアップとチャレンジできることは全て取り入れ、模擬試験の結果に一喜一憂しながら勉強を進めた。特にSUWARTIは、自宅でも1日6時間の猛勉強を最後まで続けた。今回の国家試験では、外国人候補者の合格率を上げるため、問題にルビをつけ病名に英語表示等の工夫がなされた。しかし、わずか4%の合格率であり、当院の1名も不合格だった。1年延長を希望しがんばっているが、いかに日本語の理解が困難であり十分な時間が必要であることを痛感している。SUWARTIは、合格発表の記者会見上で東日本大震災への救護参加を懇願し、4月下旬救護活動が実現した。マスコミで精神的にダメージを受けたこともあったが、それ以上にスマトラ沖大地震の恩返しができることを喜んでいる。現在は、希望のNICUで新人看護師として働いている。課題として、勉強中心の生活から働きだしたことで、国民性や宗教の違いが少しずつ表面化し気持ちのずれが生じている。しかし、お互いが受け入れの姿勢を持ち、本人が日本の看護師として成長することで、改善することを期待している。SUWARTIは、インドネシアの看護レベルの向上と母国の保助看法を立ち上げたいという大きな目標を持っている。それに対しても支援しながら、今後はお互いの看護の質向上に努めていきたいと考える。